

群馬詩人クラブ 会報 No.300

編集／群馬詩人クラブ幹事会
代表／磯貝優子
発行／群馬詩人クラブ事務局
〒370-3504
北群馬郡榛東村広馬場1067-2
現代詩資料館「榛名まほろば」内
印刷 三協印刷
振替番号 00160-4-708314 中澤睦士

主な記事

- 詩誌は、いま一⑨……………2
『SUKANPO』田口三船
『忘れた頃に出る通信』飯田光子
『ぎぎ』関口将夫
『かねこと』新井啓子
- 書評……………4
原田道子評論集『詩の未来記』川島 完
- 詩集評……………4
柳沢幸雄詩集『植物図鑑』青木幹枝
大橋政人詩集『まどさんへの質問』金井裕美子
- 追悼・武井幸子さん 原田 鰯 ……6
- 高崎現代詩の会 朗読会報告 ……6
- インフォメーション……………7
- 年刊詩集原稿募集……………8
- 受贈詩誌御礼／編集後記……………8

「会報」三〇〇号を祝って

大橋 政人

今号で「会報」が三〇〇号になるといふ。群馬詩人クラブの活動が活発に進んでいる証のようなものであろう。三〇〇号へのスピード到着の裏には、平成四年からの隔月発行といふことも大きい。何よりも各時期の幹事の皆さんの、タスキをつなごうという強い気持ちがあったればこそと思われる。

原稿の依頼があったあと、古い「会報」を引つ張り出して読んでみた。懐かしさに読み込みそうになる気持ちを押しえながらページをめくるうちに、いくつかの面白い企画に出くわした。

その一つは、それまでの「県内詩誌展望」に代わって一四五号（平成六十三年七月）か

ら始まった「風吹鳥」というコーナーだった。会員二人が対談しながら県内詩誌の動向をしゃべり合うというもので、実名入りで作品を自由に批評しているのが今読んでも新鮮だった。対談者を固定せず、順繰りに交代しながら一七八号（平成六年十月）まで続いた。もう一つ面白かったのは一四七号（平成元年三月）の「会員からのたより」という企画。会員が、その年に発表された詩の中で、印象に残った作品三篇を選び、コメントをつけて発表するというもの。言わば、現代詩手帖の「今年の収穫」の群馬県版といった感じのもので、四十名の会員が自分の好きな詩を挙げていた。その中の一人、國峰照子さんは「こ

うゆう企画があると、改めて取り出して眺めるところがいいですね」と書いていた。

以上二つの企画に共通するのは作品と作品を交流させていること。作品本位の姿勢を尊重しながら否応もなく他人の作品を読まざるを得ない仕組みになっていることである。秋の詩祭などでの人的交流も大切だが、案外、面と向かつては他人の詩についての本音は語れないものだ。こういう企画があればこそ、会員がそれぞれ他人の詩に向き合うことができた。詩は個人で抱え込むものではなく、常に他者の目に晒されているべきものだと思う。最後に個人的な思い出話を一つ。一四四号（昭和六十三年三月）の「新幹事会発足にあたり」という巻頭の文章で私は「二月九日、新田郡笠懸村の大橋宅に新幹事が集まり、午後二時から延々七時間以上（後半三分の一ほどは酒も入って）の会議の結果、今後の運動方針を決めた」と書いている。私は昭和五十八年から幹事をしてきたが、前橋の喫茶店でのコーヒ一杯で三時間という幹事会（何人も出席しなかったが）が苦手だった。それで群馬県の東端の私の家で幹事会を二か月に一回することにした。私にとっては極楽だったが、他の幹事には地獄だった。高崎方面から来る人、群馬町や榛東村から来る人など様々だったが、小鮒美江さんなど汽車を乗り継いで、はるばる富岡からやってきたのである。犠牲者の一人と言うほかない。

詩誌は、いま―⑨

個人詩誌

『SUKANPO』のいま

田口三船

ほんやりとではあるが、ずっと前から頭の中で描いていた個人詩誌『SUKANPO』がようやく誕生したのが、二〇〇八年八月。その「あとがき」にこう書いた。

「詩を書き始めて半世紀もとうに過ぎ、その間詩作から離れていた十数年を除いて、ほとんど何らかの形で同人誌等に所属して作品を発表してきました。ところでそうした活動を続けながらも、時には全く独りになって気ままに作品を発表する、そんな場を持つてもまた楽しいのではないかという思いをいつの頃からか持つようになりました」

そこではまたこうも書いた。

「発表するということは、多くの人たちに読んでいただくことを前提とします。見かけもご覧のとおり、中身もとほしいこの詩誌が、私の思いをどこまで叶えてくれるか全く見当もつきませんが、しかし動き出さないことは始まらない、そんな気持ちに急かされて『SUKANPO』第一号を送り出すはこびとなりました」

当初から、印刷はもちろん製本発送を含めて全て自分自身の手で行おうと考え、そこで先のことをおもんばかってあまり負担にならないようにと落ち着いたのが、A5版一段組

の八頁。

誌名となった『スカンポ』はタデ科の多年草で、別の呼び名を「酸葉（スイバ）」という。野原や川原の土手などに自生する多年草で、淡緑色の小花は特に人目をひく程の派手さはないが、図鑑や辞典などによると、若い茎や葉は食用になると書いてある。

ところで、この『SUKANPO』は、いわゆる独自の主義・主張を掲げているわけではない。どこかに『SUKANPO』らしいものを感じとっていただければ、それに勝る喜びはない。既刊二十二号。己の命と同じで期限は設けられないが、これからも出したい時出せる時を目安に、気楽な独り旅の気分が続けていきたいと思っている。

コレも詩誌なのかしら

飯田光子

一年に一〜二回発行の「忘れた頃に出る通信」は、果たしていつ始めて何号目になるのか？ 無責任な話だが、私は数勘定が苦手な上に整理整頓もできない。ゆるい人生を送らせてもらっている。新井頼子さんが存命なら彼女はきちんとファイリングしてくれていた

ので、その辺りのことは確認できたらうに。「忘れた…通信」の前身は、和文タイプで打った家族新聞「いいださんちのしんぶん」。二葉印刷の内職をしていた頃「水の呪文」や「烈風圏」などの仕事のあい間のタイプライター活用だった。こちらの創刊ならわかる。

一九八四年六月一日。あれから三十数年、子供の絵や夫の文章、その時々に見たり聞いたりさわったりした小さな発見を綴り、詩を載せることもあった。

「忘れた…通信」として出直したのは、やるならオカン一人でやれ！ という時期を迎えたからだ。こちらはパソコン入力だけれど、変わらないのは手作り封筒に切手。一月なら仙台の白松がモナカの包装紙や京都の老松の包装紙で封筒を作っていると幸せだ。しかし、こちらに神経がいつてしまうと、昨年だったか中身の入っていないのを送り、相手を悩ませたことがあった。ヤギさん郵便だね。

発行部数は一〇〇部前後、余ったり足りなくなつてコピーに走るといふこともある。A3二つ折り両面印刷で四ページが基本だが、もつと書きたくなつて六ページとなることもある。半分位は手渡し、人と会って読んでくれそうだな、楽しんでもらえそうだなと思う人に名刺がわりにしている。郵送分は、家族新聞仲間や友人、詩を書く人ばかりではない。通信を続けてよかったと思うのは、交友関係が広がっただけでなく社会と自分への問いかけを断続的であっても持ちこたえたことかと思う。羽生楨子さんと康二さんの発行している「想像」などを毎号読むことができるのも、勇気を出して通信を送ったから得られた喜びだ。共感力は力となつて、私はどんどん明るくなる。ささやかなことしかできないけれど、フツの主婦の考えたこと思ったことを一枚の紙に託すつて、ちよつと素敵でしよ。

個人誌「ぎぎ」

関口将夫

詩誌名を「ぎぎ」としたのは、音とか声を文字に置き換えたものにしたかった。出来ればオノマトペを使った方がいいと思っていた時に、少年の頃出会った懐かしい魚の鳴き声をおもい出した。ぎゅうたと言うナマズを一回り小さくしたような、ナマズにそっくりな魚が、郷土の川、鍬川や烏川などにいた。掴まえると「ぎぎ」と鳴くのだ。エラの近くに鋭い毒針を持っていて、この針に刺されると一日中手がしびれている。海に棲んでいるゴンズイと姿形も毒針を持っているのも似ているので同じ仲間なのだろう。このぎゅうたは学名「ギバチ」と言うのだがもともと清流に棲む魚なので、今はほとんど見ることがないので絶滅危惧種になっているのだろう。

個人詩誌は、乱暴な言い方をすれば、この魚のように、一個人の声の出しかたみたいなところがある。関口将夫と言う、自分流の呼吸のしかた、声のとどかせかた。その声をこぼに置き換える営為だと思っている。空海の「声字実相義」のことを借りれば、「声」もまた「文字」にはかならない。(世界の万物は呼吸している。その呼吸が声になり、それが凝って文字になる)。

個人誌は同人誌より、読み手と直結する面積が大きい。編集も企画も即決できる。自由

なひろがりを持っている。そのぶん自分で発した声は、そのまま自分にもどってくる。だから、いろいろな試みも出来る。私の場合、物作りが好きなので、製本は自分でやっている。自由な工夫と遊びが出来るので楽しい。ようやく十号を出したところだが、次号が読みたいと思われるような個人誌を夢みている。時代と言う巨大な手に掴まえられる時、ぎゅうたのように「ぎぎ」と自分の声を発することが出来ればと思っている。

題字を俳人で書家の山本素竹氏にお願いしたのも、氏も独自の呼吸と声をベースに生きている方だったのでお願いをした。

詩誌「かねこと」とともに

新井啓子

二〇一一年三月十一日、まだ寒い冬の日に東日本大震災は起こった。前の年の暮れから体調を崩していた。耳鳴り・めまい・身体の痛みに脱力感。そんなお年頃でもあった。その日急遽職場から帰宅した私は、新幹線に閉じ込められた家族からの知らせで、「本庄早稲田」まで車を走らせた。暮れ方のあちこちで渋滞が起こっていた。勘で抜け道を探し、一度来たことのある橋を渡って、駅前空き地に到着した後はリアシートに倒れ込み、その後の記憶が無い。

次の日から仕事は休みになり、行きつけの

病院の電子カルテが使えなくなった。テレビは見えない。いや、画面を直視できない。保存食とガソリンの補充に並び、蝋燭と月明かりで夕食をとった。家族が新たに体調を崩した。陽の光は明るさを増していったが、降り注ぐものへの不安はいつまでも消えなかった。

そのような中から何かをしようと立ち上がったわけではなかった。足元は揺れていたけれど何かをしなければいけないような気がした。それは他のことでもよかったのだろうがこれしかなかった。ということ。その年の七月、ささやかな手作りの詩誌「かねこと」創刊号を発行した。

「かねこと」はどういう意味ですかとよく聞かれる。私の好きなもの、「花(か)」「音(ね)」「言(こと)」「葉」を繋げたものと答えている。読む人によって「兼ねこと」でも「かわい猫のこと」でも。

体裁は、ゲストの方の寄稿と、詩人で図書館長の金井雄二さんに紙上ブックトークとして詩集の紹介をお願いし、多くの新たな教示を頂いている。その他は私の担当で、詩作品と二つの短いエッセイ。一つは地元の人萩原朔太郎に、もう一つは現在身近に触れることの多い子供の詩に因んだものである。

最新号は第十号で一つの区切りを迎えた。そうはいっても急に何かを変えようと言うことではない。その時々によく抱え込みながら続けて行ければいい。そのための不定期刊である。縁あって、ご覧頂ければ幸いです。

原田道子評論集

『詩の未来記』を読む

川島 完

歯応えのある詩論に出会え嬉しかった。I章の論考、II章の〈森のばあば〉とはずがたり、III章のエッセイ・書評他に構成されているが、これらは原田の「詩と生」に対する座標の提示と見てよい。というのはIII章の各詩篇をとおして「詩とは何か」を論究しつつ、本書の比重たるI章に素の気構えが、窺えるからだ。つまり「3・11」を透した危機感の普遍化だ。詩人の感受性が鋭いとは、世間が勝手に認識しているだけで、そんなことは詩人自身が知っている。こんななかでの原田の態度は、やや抽象的でありながら主体性をもって、問いつめている。その言辞を拾えば、次のようになる。

「〈新しい皮膜〉に傾斜すれば、個の孤独に陥り、〈古い皮膜〉に傾斜すれば、ただ生きるための集団の闘争にかりたてられる」

ここで〈皮膜〉について説明が要るかも知れない。が、「如何にして」と問う手前で既に行きづまっている現実を知っているわれわれは、原田の痛みを共有できることのみが、いまの「生」を支えているように思う。

II章の「森のばあば」と「森の主」は、異界（非現実）と現実ととつてもいいが、ソク

柳沢幸雄詩集

「植物図鑑」を読んで

青木幹枝

柳沢さんは、「詩」を書くことを呼吸と同じように、生きるために誰よりも必要としている。アール・ブリュットではないが、法則性と恣意性の紛らわしい混合、と同時に人を不安にさせる。書きつつも書いた字や書くために考えたその考えに誘発されて、いろいろなことが拡散的に頭に去来している。

「書くことはその去来したものを適宜挿入したりしながら、基本的には一本の流れにまとめあげることだが、書くという経験は結局書かれなかつたいろいろな去来した考えを経験することなのではないか」

（保坂和志著『試行錯誤に漂う』）

書く言葉は、たぶん彼をいつも救ってくれて、味方してくれて、言葉を使うという意味では、「詩」の上では虚構の作り手として、誰とも同等である。つまり彼はそれを謳歌している。特に後半から饒舌に語り出す。「恋」「夢」「時間」「幸福」「普通」「秘密」「切ない」などの言葉は何を束ねているのか。その壁がいつまでも私たちに厚く立ちはだかつている。それは「恋」や「夢」だったんだろうか、とか「幸福」「普通」はそのたびに尺度も解釈も異なる。その中で「悲しみの絵の具」私の周りにある悲しみは、私自身、気が付か

ラテス法と見立ててもよからう。彼は問答を通じて帰納的に一般原理を会得させようとした。現代人の原田はそこに常情が見えるのが面白い。むしろ弟子のプラトンの対話編に似ていまいか。しかしこれらを、かい摘まんで云々するのはむづかしい。原田の論旨の切実が単体ではなく、重層性をもっていてさらにエピックに包まれているからである。たやすく問いかける行為は、根の浅い樹木のようにしかない。それでも、賢治の「永訣の朝」に連なる「銃・病原菌・鉄」は、否定からはじまっていない連立方程式だ。ここまで来たとき、かつて菅谷規矩雄が、「詩は（論理）を放棄した。中心なき周辺をひたすら拡大するものとなった」と慨嘆したのを思い出した。だからといって詩への論理が枯渇しているわけではない。詩論はたえず欠如と希求に目を注ぎ、地下水のように生きている。でなければ、今度の原田の行為は救われない。

さて、原田がいみじくも『詩の未来記』（傍点筆著）と命名した理由は、〈本来「美しくも」であるはずのヒトという種はどこで壊れていったか。…あらたな変容も、そろそろあっていいのでは……〉（「あとがき」部分）に、確固としてある。彼女がどのような場所に、どのように立っているのかの存在様態は、まさに本書で示している。ニヒリズムでも慰藉でも悲鳴でもなく、これはまっとうに向かう、濃密なテクストと思うほかはない。

ないでいる、ある日悲しみは、黒い壁に染みとなっていたが、黒い染みは、黒い壁に寄り添って生きている

「寄り添って生きている」この言葉はお似合いだと言っているのではない。どうしても消えない染みなのだが、

悲しみの絵の具を、黒い壁に塗って見ると、心の染みとなって、刻まれていく

消そうとして擦るともつと広がるのではなく、悲しみの絵の具を塗ってしまふ。どうしても悲しみの絵の具を塗って見えない心を、見えないと思ひ込む必要があるのだ。

「心の闇」を明らかにせよと人はいうが、明らかにしたものはもはや心の闇ではない。見えない心がある、見えない心は、私の過去 現在 未来に、浸食していた、どうしても超えられない、切なさからの一歩先の世界

人は頭の中だけで考えるが、字にして書きながら考えるのは頭の中だけで考えるのとは違う。まず思うのは自分が書いた字によって自分の考えが書く前には考えていなかったはずと先の方に引つ張られる。書くとき、いろいろなことが起こり、始めに書いたように、いろいろなことが拡散的に頭に去来する。

彼は作品というピースを彼が生まれかわるための殻の一部にするように、自分という宇宙の周りに貼って殻の再生をしているのかもしれない。

大橋政人詩集『まどさんへの質問』 詩集を読んで思ったこと

金井裕美子

この詩集は、大橋さんの十四冊目にあたる。第一詩集『ノノヒロ』からおよそ三十五年。

ゆるやかに変化し続けてきた大橋さんがいる。——と書いたところで、はたと筆が止まった。

紛れもなく大橋さんでなければ書けない、詩人・大橋政人の詩であり、確かにそこに、いる。それなのに、いらないと、感じてしまうのはなぜか。喜怒哀楽といった感情を意識的に外しているからなのだろうか。自己表現とか、詩とは何か、自分とは何か、主義主張といったものから遠い所で、物の芯を突こうとしているからなのだろうか。私はまだ、この「なぜ、いらない」と感じてしまうのか」に、

答えらしい答えを見つけていない。このことについて、もう少し考えてみたいと思っっている。そういえば、この「感じ」は、まど・みちおさんの詩を読んだときにも感じる不在感と同じ類の「感じ」である。

まどさんといえば、詩集『まめつぶうた』の「はじめに」の中で「私は私に不思議でならない物事には何にでも無鉄砲にとびついていて、そこで気がすむまで不思議がるのです。」と言っているが、どうやら大橋さんにもこの「不思議がり」の傾向があるようだ。不思議がりながら、気がすむまでよく物事を

注視している。カリフォルニア・ポピーを、玉蜀黍の葉っぱがバタバタしているのを、U字溝の上に腹這いになっている少年を、顔を、人間を、歩くを、縫い目のなさを。そして、注視することによって、目の前の事物だけがスポットを浴びたように、世界の中に際立つ。それら事物の本性を、新たなものの見方を、大橋さんは独自の感性で掴み取ってきたのだ。これからも大きな問いに飲み込まれたまま、空にブカブカ浮いている問いを賛嘆の言葉に変えながら、現代詩というくくりから抜けて、「詩」そのものをみせてほしい。小さなものの中に世界を感じたとき、読者もまた大きな問いに飲み込まれずにはいられないだろう。

〈天衣無縫〉という言葉の／そのオソロシサが／この年になって／初めてわかった／ネコは／天衣無縫だから／天衣無縫である／／本体と動作／静態と動態／オソロシイことに／二つの間に／どんな縫い目もない〉
〔天衣無縫〕より〕

ネコをひっくり返してあっちこっち点検しただろう。動きを注意深く観察しただろう。ネコにはとんだ迷惑な話だが、おかげで私は天衣無縫に驚いて、ヒトもまた天衣無縫、さらに、目に見えるものと見えないものの間もつながっている、そんなことも思ってみた。

大橋さんは、この詩集で、第十二回「三好達治賞」を受賞された。この詩集が好きな私としては（自分のことではないのに）とても嬉しかった。心よりお祝い申し上げます。

追悼・武井幸子さん

原田 鰐

武井さん、あなたの通った駒込中学校のある旧染井村の界隈では、また桜のトンネルが眩しく広がり、少女時代のあなたが心ときめかせながら走り抜けたあの季節がやって来ました。

日々は途絶えることなくやって来て、去っては、またやって来る。人々はそこで出逢い、かけがえない人生のドラマを繰り広げる。ドラマはやがて、静かに、あるいは唐突に、幕が降ろされる。人々はそれぞれの方角に去って、そのあと、舞台には誰もいなくなった。そう思った瞬間、いつの間にかもう舞台の上は行き交う人々で賑わっている。肉体は滅びても、新たな魂の鼓動が、舞台上では途切れることなく続いてゆく。

一人の人間がそこにあるべきものとして生きる姿を、その営みが自然を織りなし、静かに世界を呼吸し、やがてやわらかに光輝き世界を可視化する。武井さんは、そんな世界をひたすら描写し続けた。

突然、あなたもその舞台から去った。だが人にとって舞台とは肉体というかりそめが宿るための装置。だから、あなたはそこから解放されたのだ、と私は考えたい。そしてそういう世界を感じさせるあなたの詩篇を思い出す。

あなたが、菜園で大根の芽をうる抜く、集めた大根葉のざるを持って立ち上がる。その時、あなたのかすかな周辺にかすかな空気のうちねりが生まれる。その空気のさざ波は、野山を過ぎ、川面を渡り、街の空の風となつて、やがて地球をめぐる大気の流れとなる。宇宙へと、あなたは永遠そのものである。

― 肉体は借りたものだから、丁寧に、分子にして、地球に返しませう。言葉も、もう苦しきも嘆きも卒業ですから、空気にしてお返しします。文章で、自己を見つめる作業ももういいです。知性とか感性とかは、愛しい皆さんに感謝を込めてささげます。―
いま身軽になつたあなたは、時間にも空間にも束縛されることなく存在する。そうか、返すということはあなたが宇宙になるということだったのですね。

そうはいっても、ひとりの死を受け入れても、その喪失の悲しみを癒すことにはなりません。取り返しがたい喪失の悲しみは感受性の防壁を決壊させて、人を精神の危機にまで至らしめる。それでも私たちは自分の力で、時には支え合つて、武井さんのお別れというこの現実から目をそらすことなく乗り越えて行かねばならない。なぜなら、私たちは愛する者の死の悲しみを耐え忍ぶことが出来るからです。皮肉なことに、この世界では、悲しみだけが人を真に優しくしてくれるものだ知っているのです。

イベント報告

高崎現代詩の会 朗読会

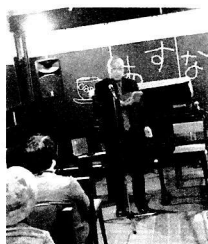
「浅き春に詩を味わう」

カフェあすなるにて 2/26(日)

梅の開花の話題が届く季節。朗読する人、聴くだけの人、想い様々にあちらこちらから集まった。今回は、広報が行き届いていなかった、遠方より「新聞のイベント欄で観たので来てみました。」と参加してくださった方もいた。その男性は、詩は書いていないとのことだったが、八木重吉の詩を聴かせてくださった。詩を書く方も、書かない方も、共に詩を楽しめた午後のひとときであった。

参加者は十九名。会員が八名、会員外が十一名。朗読詩を印刷して持参された方、音楽CDを用意してこられた方、絵本と詩のコラレーションを展開されたお二人、などなど個性が発揮されていたように思う。孀恋村から参加のUさんは、「自宅付近はまだまだ雪が積もっているんですよ。」とおっしゃった。こうした朗読の合い間の何気ないひと言も、この朗読会ならではの美味であった。

鬼の大笑い覚悟で来年のことを言えば、たぶん来年も開かれるはず。来年二月、ひとの声の心地好さを、詩を、珈琲と紅茶を、ご一緒させてください。(金井ゆ)



インフォメーション

第16回 あすなる忌

日時 4月9日(日) 午後2時より

参加費 5,000円

(第1部のみ参加は資料代・珈琲代850円)

【第1部】講演・詩朗読

(14:00～16:30 カフェあすなる)

講演「崔華國と金素運『朝鮮詩集』」を語る

細田傳造氏(詩人)

1943年東京生まれ。

2013年『谷間の百合』で中原中也賞受賞

聞き手 藤井浩(上毛新聞社論説委員長)

詩朗読 志村喜代子、斎藤みね子、平方雪子、
黒川初美、関口将夫(敬称略)

【第2部】懇親会

(17:00～19:00 豊田屋旅館)

連絡先/事務局・藤井浩

電話090-4913-1772

第20回 大手拓次をしのぶ会
「薔薇忌」

日時 4月23日(日)

参加費 500円

◇墓前祭 13:00～ 大手拓次墓前

◇第2回大手拓次賞授賞式

13:30～ 磯部温泉会館

◇語る集い 14:00～16:00 磯部温泉会館

○講演: 佐藤直樹氏

(土屋文明記念文学館学芸員)

○茶話会

薔薇のケーキをいただきながら

連絡先/事務局・大手拓次研究会

代表 真下宏子

電話027-385-5703

高崎現代詩の会

現代詩ゼミのご案内

高崎現代詩の会では、午後2時より総会が開かれ、
総会終了後に現代詩ゼミを開催いたします。

会員外の方も参加もできます。(参加無料)

皆様、どうぞいらしてください。

日時 4月16日(日) 14:40～16:20

場所 高崎中央公民館

講師 樋口武二氏(「詩的現代 第二次」発行人、
「Essence」編集・発行人、群馬詩人クラブ会員)

演題 「グズグズと詩のことなど、」

*ココスで懇親会

ゼミ終了後に、講師を囲んでお茶会を。

お問合せ/会長・志村喜代子

電話027-352-9745

『月に吠える』刊行100年

第45回 朔太郎忌

どこがヤバイの？ 朔太郎

日時 5月14日(日) 13:30開場 14:00開演

場所 前橋テルサホール

入場料 500円

第1部【シンポジウム】

松浦寿輝氏(朔太郎研究会会長、詩人、小説家、批評家)

穂村 弘氏(歌人、詩人、批評家、翻訳家)

高橋源一郎氏(小説家、文学者、文芸評論家)

第2部【朗読】

『月に吠える』朗読

監修・演出 萩原朔美前橋文学館館長

お問合せ/第45回朔太郎忌実行委員会

(萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち前橋文学館内)

電話027-235-8011

年刊詩集第四十集

原稿募集

締切日 七月三十一日(日) 必着

参加費 会員 5000円
会員外 5500円

*但し、二頁を超える作品は、いずれの場合も一頁あたり2000円の追加となります。

形式 見開き二頁(40字×40行)を基本

とし、最初の五行は表題・作者名

*行数オーバーの場合追加料金となりますのでご注意ください。

発行 十一月発行

配布 平成二十九年度総会にて(2部)

*当日欠席で郵送を希望する方は、参加費に送料500円を加算して振り込んでください。

参加費振込先 郵便振替で左記へ。

口座番号 00110151655622

口座名義 斉藤 守弘

*振り込み手数料は自己負担となります。

*年刊詩集分〇〇円・郵送料500円と明記のこと。

振込期限 十一月十日まで

原稿送付先 郵送・FAX・メールで受付

郵送

〒370-3504 北群馬郡榛東村広馬場106712

現代詩資料館「榛名まほろば」内 群馬詩人クラブ事務局

富沢 智

FAX 0279155106605

メール harunamahoroba@nifty.com

*原稿はコピーをとりつけておこしてください。

三好達治賞 受賞

当会員の大橋政人さんが第十二回「三好達治賞」を受賞されました。心からお喜び申し上げます。

受賞作品 詩集『まどさんへの質問』
贈呈式 3月24日(金)
大阪市中央公会堂小集会室にて

*受賞詩集の一部が
文藝春秋社「文學界」5月号に
掲載されます。

受贈詩誌御礼

*御惠贈感謝します。

長野県詩人協会会報 134 長野県詩人協会
『静岡県詩集』anthology 2016

第25集 静岡県詩人会

福島県現代詩人会会報 114 福島県現代詩人会

山形県詩人会会報 31 山形県詩人会

岩手県詩人クラブ会報 91 岩手県詩人クラブ

茨城県詩人協会会報 23 茨城県詩人協会

ミニコミ紙「裸ら心しん版ばん」創刊号

こまつかん

(三月五日現在 敬称略)

◆第52回上毛文学賞 詩部門

大山瞳さん(前橋市天川大島町)の「父の軍歌」が入選に選ばれました。おめでとうございます。

◆編集後記◆

武井幸子さんは、「夜明け」、高崎現代詩の会、「療」で活躍されていたが、昨年十二月に急逝。今号に、「療」同人の原田鰐さんから追悼文をお寄せいただいた。今後「夜明け」「療」でそれぞれに、追悼の特集を予定とのこと。心からご冥福をお祈りいたします。

順調に号を重ね、会報は300号を迎えた。年刊詩集は第40集の募集を始める。切のいい数に合うと節目を意識するものだ。個として自立し、かつ詩人クラブという団体に所属しているということはどうか。名簿を見ると、二〇〇六年十月には一四〇名いた会員が、二〇一七年現在一〇六名。高齢化が進んでいることもあるだろう。詩誌や団体に属さなくても詩は書けるし、発表手段が多々ある時代でもある。では、なぜ私(私たち)はここにいるのか。過去の会報をめくりながら、詩を書く方々の中に身を置きたいと願って入会したことを思い出した。

四月に入ってから出していた本会報を、今年は三月末にお届けすることにした。発行を早めることで、より多くの詩のイベント情報を皆様にお伝えしたいとの思いから。時は春。所変わればなんとやら。いつもと違う風が吹く場所に出かけると、いつもと違う気分になれるかもしれない。(金井裕美子)

「群馬詩人クラブのホームページ」

サイト名

http://gunmashijinclub.jimdo.com/